

中学生・高校生の登校回避感情に関する一研究

— 登校促進要因、登校回避行動との関係を中心に —

笠井 央理恵

I. 問題と目的

近年、不登校（登校拒否）や家庭内暴力、心身症など、子どもの心と体には様々な破綻が起こっており、中でも、心理的な理由で学校を長期欠席する児童・生徒は年々増加し、文部省の学校基本調査による「学校がらみ」を理由に年間30日以上欠席した「不登校」の児童・生徒数は、歯止めがかからないまま、毎年、「過去最高」を更新し続けている。

このような現状の中で、森田（1991）は、中学2年生を対象にして調査を行い、(1) 登校回避感情を示すが、がまんして登校する生徒、(2) 登校回避感情を示し、遅刻・早退行動をとる生徒、(3) 登校回避感情を示し、遅刻・早退行動を含めて欠席行動に至る生徒の3群を捉えようとしており、「遅刻・早退群」と「潜在群」を不登校のグレイゾーンと表現し、年々急速な勢いで増え続けている現代の不登校現象を理解するためには、各種の統計に現れない「グレイゾーン」の膨大な広がり視野に入れ、多くの子どもたちに共通して見られる「学校がらみ」の感情について、その要因を突き止める必要があると指摘している。しかし、本城（1996）が指摘するように、登校回避感情は子どもが不適応に陥っている徴候であるとともに、子どもが成長していくための一つの契機にもなり得るものであり、単に登校回避感情があるかないかということだけでなく、その子がどのような登校回避感情を有しているのかという質を問題にすることが重要であるということになる。よって、本研究では、笠井（1996）に引き続き、生徒が学校へ行くことを促進している要因として、学校の魅力（友人関係、対教師関係、手段的自己実現、コンサマトリーな自己実現）と、規範的正当性への信念（本人の信念、親の信念・態度）からなる登校促進要因を取り上げ、この登校促進要因が、① ストレス反応、② 「学校へ行くのが嫌だ」という登校回避感情や「学校へ行きたい」という登校への欲求といった登校に対する感情、および③ 欠席、遅刻、早退といった登校回避行動に対して、どのような影響を与えているのかを検討し、年間の欠席日数が30日未満の生徒の状況を理解することを目的として、以下に挙げた仮説の検証を行うことにした。

仮説①登校促進要因の中の「学校の魅力」を強く感じている生徒は、そうでない生徒に比べて登校への欲

求をより強く感じており、登校回避感情をそれほど感じておらず、ストレス反応もそれほど示さず、登校回避行動も少ないであろう。

仮説②登校促進要因の中の「学校の魅力」をあまり感じていない場合、「規範的正当性への信念」の中の「本人の信念」の強い生徒は、そうでない生徒に比べて登校回避行動は少ないであろう。

II. 方法

B 県内の公立中学校1、2年生225名（男子114名・女子107名・不明4名）と公立高等学校1、2年生228名（男子94名・女子131名・不明3名）を対象とし、1998年11月に調査を実施した。調査は、各クラスごとに、担任教師あるいは教科の担当教師により実施され、調査内容は、笠井（1996）、永田（1995）、森田（1991）を参考にした、学校の魅力尺度（26項目）、規範的正当性への信念尺度（8項目）、ストレス反応尺度（35項目）、登校に対する感情を測定する項目（2項目）、学校外の誘因を測定する項目（2項目）、登校回避行動を測定する項目（3項目）から構成された質問紙調査である。なお、本研究においては、中学生と高校生の発達差や生活経験の違い等を考慮して、それぞれ別に分析を行っている。

III. 中学生の結果と考察

各尺度について因子分析を行ったところ、学校の魅力尺度からは「手段的自己実現」、「対教師関係」、「友人関係」、「コンサマトリーな自己実現」の4因子を、規範的正当性への信念尺度からは「本人の信念」、「親の態度」の2因子を、ストレス反応尺度からは「不機嫌・怒り」、「抑うつ・不安」、「肯定的感情」、「無気力」、「身体症状」の4因子を抽出した。

各変数間の相関、分散分析および重回帰分析の結果から、登校に対する感情およびストレス反応のそれぞれについて、学校の魅力の与える影響が大きく、中でも「コンサマトリーな自己実現」が大きな影響を与えており、学校に行くことですぐに何らかの満足が得られたり、嫌なこともないと感じている生徒は、そうでない生徒に比べて、学校へ行くのが嫌だと思うことが少なく、学校へ行きたいと思うことが多く、ストレス反応が低いということが示された。また、登校回避行動の中の「欠席」に

については、規範的正当性への信念の中の「本人の信念」の与える影響が大きく、学校へ行かなければならないという気持ちの強い生徒は、そうでない生徒に比べて、学校を休むことが少ないということが示され、仮説①と②は部分的に支持された。

IV. 高校生の結果と考察

各尺度について因子分析を行ったところ、中学生と同様に、学校の魅力尺度からは「手段的自己実現」、「対教師関係」、「友人関係」、「コンサマトリーな自己実現」の4因子を、規範的正当性への信念尺度からは「本人の信念」、「親の態度」の2因子を、ストレス反応尺度からは「不機嫌・怒り」、「抑うつ・不安」、「肯定的感情」、「身体症状」、「無気力」の4因子を抽出した。

各変数間の相関、分散分析および重回帰分析の結果から、各ストレス反応について、学校の魅力の中の「コンサマトリーな自己実現」がストレス反応に対して抑制的な影響を与えている一方で、規範的正当性への信念の中の「親の態度」は促進的な影響を与えており、学校に行くことで勉強面での満足がすぐに得られたり、嫌なこともないと感じている生徒は、ストレス反応が低いが、親に学校へ行くように言われる生徒は「不機嫌・怒り」および「抑うつ・不安」が高いということが示された。また、ストレス反応は、中学生以上に学校外の出来事からも影響を受けていることが示され、家庭生活上のストレスの存在が推測された。登校に対する感情については、学校の魅力の与える影響が大きく、中でも「コンサマトリーな自己実現」および「友人関係」が大きな影響を与えており、学校での友人関係や勉強面からすぐに満足が得られたり、嫌なこともないと感じている生徒は、学校へ行くのが嫌だと思ふことが少なく、学校へ行きたいと思ふことが多いということが示された。各登校回避行動については、規範的正当性への信念の中の「本人の信念」の与える影響が大きく、学校へ行かなければならないという気持ちの強い生徒は、登校回避行動が少ないという

ことが示され、仮説①と②は部分的に支持された。

V. 総括的考察

中学生、高校生ともに、学校へ行くことですぐに何らかの満足が得られたり、嫌なこともないと感じている生徒は、ストレス反応が低く、学校へ行くのが嫌だと思ふことが少なく、学校へ行きたいと思ふことが多いということが明らかになり、即時達成的な充足感が得られるかどうか重要な基準となることが伺われた。しかし、楽しいと感じたり、満足を得られることの中身としては、中学生においては、それぞれの生徒によって様々であると考えられるのに対して、高校生においては、勉強面と友人関係の意味が大ききようである。なお、「肯定的感情」についても、中学生、高校生ともに「友人関係」の与える影響が大きく、思春期にあたる中学生と高校生にとっては友人との関係が重要であることが伺われた。

一方で、登校回避行動については、即時達成的な充足感が得られるかどうかということは抑制する要因にはならず、学校へ行かなければならないと思ふかどうかという生徒自身の考えが実際に登校回避行動を抑制している要因であるようであり、特に、高校生においてその傾向は顕著であった。高校生になるにつれて、自分自身の考えに基づいて行動するようになり、そのような状況では、生徒自身が行かなければならないと思ふかどうかが大きな意味をもつということであるのかもしれない。しかし、調査を行った高校は進学校であり、本研究の結果が進学校特有のものであることも考えられ、今後は、違うタイプの学校においても調査を行い、検討を重ねていくことが必要であると思われる。また、登校回避行動に対して影響を与える要因について、本研究で扱っていない他の要因の存在が想定されるため、今後の検討が望まれる。最後に、本研究においては、質問紙の内容上の問題で、小学生に対しては調査を行うことができておらず、小学生にも理解でき、回答できるような質問紙の作成も今後の課題であろう。